◇河辺杲先生と◇ 一問一答

保育の計画をたててもその通りいかないことが多いのですが、それをどう考えたらよいでしょうか。

計画というものは、子どもがこわしてくれるといいますか、むしろその子どもの状態によって計画を修正していかなくてはいけないんじゃないかということを最近思っています。

これは実際に私がやっています臨床治療の自閉的傾向の強い子どもの例ですが、ボクシングの時に使うサンドバッグに似せて作った遊具にのぼりついて、自分でゆらゆら揺らしていました。その時に、私も反対側からぶらさがるようにつかまって抱きかかえて子どもと同じように揺れているうちに、子どもがストンと床に敷いたマットの上に落ちてしまったのです。それで私は、立たせようとか、上げようとかいうのではなしに、とにかくその子どもに触れていったわけなんですけれども、その時に、その子どもは手をさし出さないで足を私の前に差し出したもんですから、私はすぐ足を持って引っぱっちゃったんですね。これはもう、自然のなり行きでそうなっちゃったんですが、そうしたら、それをもっとやれと非常に強く要求して参りました。今度は足を持ってその辺を引きずりまわしたんです。それを止めると、自分で寝ころんでしまって、足をあげてもっと引っ張れというわけです。

子どもの心の動きをとらえることによって、計画した通りでなくても、どんどん活動がすすんでゆくのです。ですから相手のその時の衝動なり気持ちを、できるだけ敏感に感じとっていくという動きが、常に治療関係における私の中にあるわけです。

保育の場面でも、計画が具体化されたところで考えてみますと、子どもの動きによって修正していかなければならないことは、たくさんあるんじゃないでしょうか。子どもに対するこちらの出方によって、子どもの受ける受け方がこちらへ感じられ、それによってこちらが動きを変えていくといったような相互作用といいますか、これが教育の中でなかったら、本当の指導と言えないんじゃないでしょうか。

最近臨床の中で特にそういう自閉的な子どもを多く見ていて、結局、彼等はそういう何か相手との関係の中で本当に感じるものを持たなかった子どもじゃないかという

風に感じておりますし、自閉的じゃなくても、最近の子どもっていうのは、そういうかかわりあいが少ないんじゃないかと思います。もっと子どもの心の動きを見ながらの触れ合いの中で、こちら側の動きを修正していく、つまり教師は常に子どもの心の動きにそって教師の計画にみきりをつけることができるという自然な動きが、幼児との教育においてはとても大事だと思っています。

子どもが同じことばかりくりかえすというのは、いったいどういうことなのでしょうか。

どうしても子どもが同じことを繰りかえしていると、「またか」という気持ちが出て来て、口には出さなくても、心のどこかでそう思ってしまいます。そしてできるだけ早い機会に、ちがった経験をさせたいとまで思ってそのような動きをしてしまい、それが指導だと思っている方が多いのではないかと思います。

ある幼稚園で毎日毎日何枚も何枚も「京都タワー」を描いていた子どもがいました。外観としては非常にピッタリの絵を描いているんです。そこの園はたまたま、絵画製作の研究園であったため、そこの先生は相当辛抱していたわけですけれど、私が行った時には、もうたまらなくなって何とか違う表現をさせたいという気持ちが高まっておられたように感じました。もう延々とこれで、我慢ならないという所まで来てその問題を投げかけられたのです。

私はその時そこまで子どもが描くには何かあるんじゃないか、という感じがして話を聞きながら、また現場の作品を前にずっと並べてシリーズ的な作品をみた時に、よくも忍耐づよくここまで繰り返して描いてきたなと、しかし何かそこにはその子どもの訴えようとするものがあるんじゃないか、訴えきれないでいるものがあるんじゃないかということをその時感じたのです。根気よく訴え続けている何かを、私たちがまだ汲まないでいるのではないかということについて話し合いました。

翌日また例によって「先生、紙ちょうだい」といって来たので、「何が描きたい」ときくと、「京都タワー描く」と言います。そこではじめて担任の教師が京都タワーにのぼった時の気持ちをきいてみましたら、「高いところから見下ろしたら、目がまわりそうやった。目まいが起りそうやった」と子どもが言ったそうです。その時には細長い画用紙を縦に使って紡錘形のようなものをグルグルと描いていて、高いところから見おろしたら先が細くなってみえますが、そんな感じの絵を描いたんです。その翌日から全然タワーを描かなくなった。何かこれが自分のとっても言いたかったもの

のようで、その作品を見てそれがようやく描けて満足したのだなあという感じがしました。

私たちは絵を描くとき、話しすぎて、絵で表現しなきゃいけないところまで言葉で言ってしまう。そうするともう絵は描かないですんでしまうという経験をよくしますけれど、それとは逆にこの場合のように、何か言いきれないもの、表現しきれないものを、その子にとっては引き出せたんじゃないかとも思いました。

つい最近もある幼稚園で、みのむしをいっしょうけんめいに探している子どもがいました。園の周囲にある木のみのむしをトコトンすみずみまで探して歩いています。垣根にのぼってとったりしますから危いので、なんとかやめさせて方向転換させたいと、担任の教師がいっしょうけんめいになっていたんです。そこの園長先生は幼児のこうした行動をよく見守っておられ、「もうちょっとやらせてみてはどうだろう私がみてあげるから」というので、みのむしとりを園長先生も子どもについて探したり取ったりされていたそうです。「どれどれここに大きなみの虫がいる、あっあそこにも大きなのがある」と言って手の届く範囲で取っていました。園長先生もある程度やらせたら他の方に気が向いていくだろうという心がどこかにあったわけなんです。するとある日、その子どもたちと一しょに探し歩いていると、ものすごく大きなのが目に入ったので、思わず「わあ、大きいなあ」と言ったら「あれ取って」と言ったので、竹竿のようなもので取ってやりました。すると子どもはまじまじとこの大きなみのむしを見て、「なあ、こんな大きいのは見たことがないねえ」といかにも感激し、また満足したように言うんですね。そしてその翌日からこのみのむしとりはすっかりやめて、またちがう虫を探しはじめたようです。

子ども自らが忍耐強く、くりかえしている中で子どもが求めているのは、そういう内面の感動というもので、私たちは、そこを考えなきゃならない。私たちが、それを充分汲みとったときに、違った方向へ子どもが動いていく。単純に子どもがくりかえしていると、すぐ無駄なことをしていると思って、これを禁止したり、方向転換を急いで強制したりすることはもちろん考えねばなりませんが、ぎりぎりまで待つとか、それを認めて受けとめていくとかいうことだけではなくて、その時その場の子どもの内面に、もっともっと近づいていく努力が私たちの姿勢の中にあるかどうかが問題だと思います。ただ待っていたらよいのだという、そういったテクニックだけではなく、子どもの内面をできるだけ深く理解してその心に近づいくことによって、待つという姿勢ができてくるのだと思います。

あとかたづけは、子どもにとってどういう意味があるのでしょうか。

子どもがあと始末をする時に気をつけてよくその活動を見てみると、「よく遊んだ時にはよくあと始末ができる」とよく言われている。私もその通りだと思います。やはり子どもというのは、自分にとって非常に大事なものというのは、言われなくてもちゃんとあとしまつをしますね。これは明日も続けて使って遊びたいと思えば、使っている道具をどこにしまっておこうか考えます。自分だけがわかるところへ、むしろ他人に使われたくないのでこっそりと部屋のすみっこへしまいこんだり、なにかで見えないようにすることを考えたりしています。明日も使おうとすれば、どこに、どういう風にしておけばよいかということを子どもなりに考えてくれます。その辺にあとかたづけの必然性があるように思います。

しかし、その反面、満足しきった後では、遊具は子どもたちにとっては、ちょうどお腹がふくれた時に目の前におかれた御馳走みたいなもので、一生懸命に遊んで泥んこにしちゃった時などは、そのスコップもバケツも、もういらないものになってしまいます。しかし、そういうように満足し切ってしまって子どもにとってこれは関係ないんだという風になったものについても、私はやはり自分から離れたものへのかかわり方を学ぶ良い機会にもなるのではないかと思うのです。

例えば「先生もやるから、みんなも手伝って」と言って手伝いということをおぼえさせるようにもっていくこともできるでしょうし、「この中のどれであればかたづけるのを手伝ってくれるかな」といって自分のかたづけたいものを選ばせてかたづけることを手伝いやすいようにもっていくこともできます。あとかたづけは生活態度の主要な内容として、なんとかしてやらせていく、それがしつけとして大切だと考えて指導なさっていますが、なにか子どもの心(気持ち)を無視した指導が多いのではないでしょうか。どんなしつけであっても「気持ちよく、たのしく」ということが伴わないと身についていかないだけでなく、社会的な態度も育っていかないようです。

あとかたづけについてもまだまだ考えていかなければならない問題がたくさん残されているように思います。

子どもにとっての価値というものは、一体何だろうかということ。子どもたちが持ちつつある価値というものと、教師が持ってこれは絶対だと考えこんでいる価値というものを、この際もう少し考えてもいい時期に来ているのではないでしょうか。

(大津市教育委員会教育相談室)

(現職研究会での講演後の話し合いより)